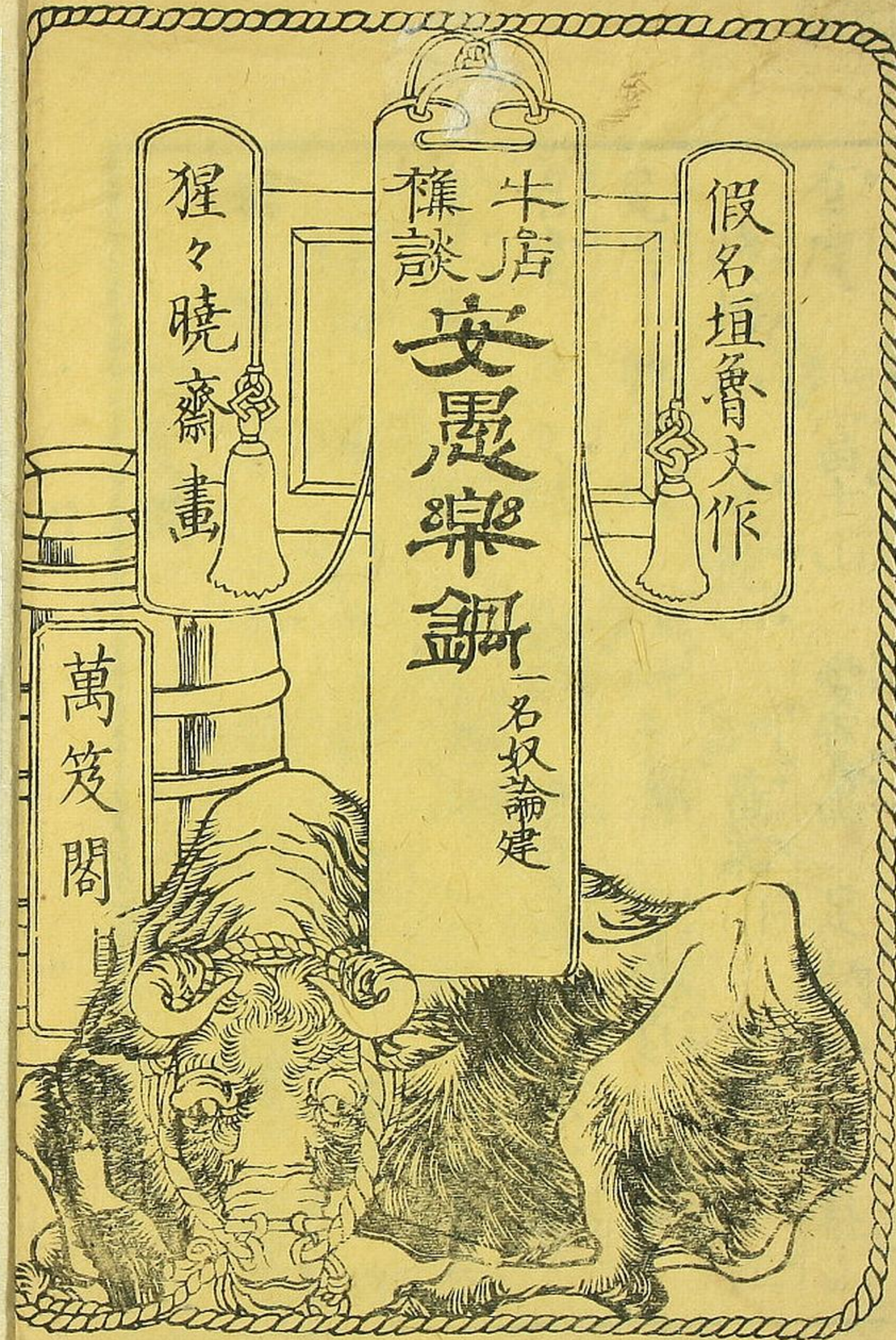


假名垣魯文作

牛店 權談 **安愚樂鍋** 名奴論建

猩々曉齋畫

萬笈閣



牛店 雜談 **安愚樂鍋三編卷之下**

東京 假名垣魯文著

○茶店女の隠食

▲このころ十八九や或は廿をニツツしたる者多かりしなり。此の頃、田舎の
 ところへお由ひかきをもりちりめんのもうかへしよきものをもつて「隠食」を
 するもの見世多かりしなり。と云ふ馬にちりめんを掛りて、ちりめんをひらき、
 かややくかひをとりたるあめ、のあひとねづものあはらるるものをして
 んをひらき、ちりめんをひらき、ちりめんをひらき、ちりめんをひらき、ちりめんをひらき、
 めんをひらき、ちりめんをひらき、ちりめんをひらき、ちりめんをひらき、ちりめんをひらき、
 やとせも、ちりめんをひらき、ちりめんをひらき、ちりめんをひらき、ちりめんをひらき、
 まい、ちりめんをひらき、ちりめんをひらき、ちりめんをひらき、ちりめんをひらき、
 五十ぢりめんのちりめんをひらき、ちりめんをひらき、ちりめんをひらき、ちりめんをひらき、
 きねりめんのちりめんをひらき、ちりめんをひらき、ちりめんをひらき、ちりめんをひらき、

官態とらふ若一^{あま}庭がくうどぶらをいへおんて
 門口^{かど}で出あつたらう若やアあつらう若と
 サアゆ^ゆでもらふ若よおそのまことなをいッをられ
 くのをら^ら若^若ゆ^ゆくもら^らた^たぶ^ぶこのが物
 食サ^くを色^{いろ}から食^くつたふあ^あつ^つ若^若月^{つき}のこ若を
 ま^まく^くと^とら^らけ^けよ^より^りく^くひ^ひけ^けそ^そく^くか^かづ^づら^らま^まう^う
 たん^{たん}も^もサ^サその^{その}ま^まご^ごあ^あけ^けま^まぐ^ぐ生^な物^{もの}の^の食^くへ^へあ^あへ^へ
 肉^{にく}へ^へお^およ^よせ^せく^くた^たぶ^ぶが^がや^やら^らも^もた^たた^たる^るた^たぶ^ぶの^のゆ^ゆう^う

あやア^あら^らあ^あの^のヨ^ヨダ^ダガ^ガネ^ネ猪^ぶや^や麻^あの^のび^びお^おが^がん^んう^う
 中^{ちゆう}の^の半^{はん}が^がひ^ひら^らけ^けて^てう^うら^ら人^{にん}ま^まの^のま^まあ^あを^を
 き^きく^くと^と牡^ぶ丹^{たん}や^や知^ち葉^{えつ}の^のあ^あん^ん中^{ちゆう}り^り茶^{ちや}ぢ^ぢや^やア^アあ^あん^ん
 あ^あん^んご^ごも^も牛^{ぎゆう}ふ^ふか^かぢ^ぢる^る若^若と^と活^{かつ}ぶ^ぶの^のけ^けあ^あら^らト^ト云^い
 こ^こと^とだ^だく^くら^らモ^モウ^ウく^くら^らぬ^ぬ若^若や^やア^アぢ^ぢら^らい^いか^かあ^あひ^ひど^ど
 若^若や^やし^しほ^ほく^く若^若あ^あつ^つく^く牛^{ぎゆう}一^{いち}ッ^つて^てん^んご^ごう^うと^とま^まあ^あ
 た^たヨ^ヨあ^あく^くら^らま^まん^んの^の若^若の^のく^くせ^せあ^あよ^よく^くひ^ひら^らけ^け
 く^く半^{はん}を^をく^くあ^あく^くッ^つた^た子^こホ^ホン^んニ^にを^をま^まあ^あや^やア^アか^かん^ん

安志集三

しんはるヨトにのゆるあきくを ^{こつ}「そのやアちの」活
 があるのサ今 ^{いま}まも ^{まも}あも ^{あも}を ^をあさ ^{あさ}あつたが
 私 ^{わたし}やア ^あの ^のし ^しめ ^めの ^のし ^しめ ^めち ^ちや ^やん ^んが ^がお ^お場 ^場と ^とう ^うも ^もま ^まけ ^けて
 母 ^{はは}と ^とこ ^こち ^ちれ ^れを ^をあ ^あま ^まさ ^さり ^りは ^はし ^して ^て ^い親 ^{ごう}を ^を ^たら ^らき ^きを
 あ ^あど ^どり ^りあ ^あく ^くせ ^せあ ^あり ^り ^あと ^と ^あま ^まの ^のこ ^こら ^らう ^う ^あま ^まの ^の ^あま ^まの
 その ^{その}あ ^あと ^と ^あま ^まの ^の ^あま ^まの ^の ^あま ^まの ^の ^あま ^まの ^の ^あま ^まの
 う ^うア ^アの ^の ^あま ^まの ^の ^あま ^まの ^の ^あま ^まの ^の ^あま ^まの ^の ^あま ^まの
 あ ^あぐ ^ぐら ^ら ^あま ^まの ^の ^あま ^まの ^の ^あま ^まの ^の ^あま ^まの ^の ^あま ^まの

る ^るら ^ら ^あま ^まの ^の ^あま ^まの ^の ^あま ^まの ^の ^あま ^まの ^の ^あま ^まの
 さ ^さら ^ら ^あま ^まの ^の ^あま ^まの ^の ^あま ^まの ^の ^あま ^まの ^の ^あま ^まの
 り ^り ^あま ^まの ^の ^あま ^まの ^の ^あま ^まの ^の ^あま ^まの ^の ^あま ^まの
 こ ^こ ^あま ^まの ^の ^あま ^まの ^の ^あま ^まの ^の ^あま ^まの ^の ^あま ^まの
 こ ^こ ^あま ^まの ^の ^あま ^まの ^の ^あま ^まの ^の ^あま ^まの ^の ^あま ^まの
 こ ^こ ^あま ^まの ^の ^あま ^まの ^の ^あま ^まの ^の ^あま ^まの ^の ^あま ^まの
 こ ^こ ^あま ^まの ^の ^あま ^まの ^の ^あま ^まの ^の ^あま ^まの ^の ^あま ^まの
 こ ^こ ^あま ^まの ^の ^あま ^まの ^の ^あま ^まの ^の ^あま ^まの ^の ^あま ^まの
 こ ^こ ^あま ^まの ^の ^あま ^まの ^の ^あま ^まの ^の ^あま ^まの ^の ^あま ^まの
 こ ^こ ^あま ^まの ^の ^あま ^まの ^の ^あま ^まの ^の ^あま ^まの ^の ^あま ^まの

寄書集二

四



なるときをりからせむものらんをきりきん
 まじりてゆりせむしんしんもろふ十兩で
 押おせ小こきひが十兩仕しな別べつ殿だんりらむいぐ身みの
 せりうをかぎってらるゑあてが二十ふぬで親おやえが
 こゆる者ものあらとん月つきらら給たま金のかねのかじもあて
 やらふしは元のもとまふ入りまじりてさんさじのぬ
 か玉たまや六む分ぶんづぬあんぞの日のわらぐれぞう
 ゆうで福ふくむりまじりて合あひの思おもでも懐妊懐妊て

オギヤアとさ入りつぐたえとんは物ものの本ほん圓えんへ帰かへらう
 が一いつはこせあゆゆふあまゆるとのことだ
 からまぐの目めえへあかけらとりのと人ひと力ちから車くるま
 で人ひと力ちから車くるまをリリニニリリキキ その日ひゆ様さまをぬへびつて目めえへ
 かくつたとらうが親おやも親おやのためとりのふりの目め
 車くるまゆらゆらと千里せんり万まん里りは元のもとまふもあま
 の遠とほ人ひとあんぞのあぐさあまあるのりやせ
 らまのま入いやあ待まちてあるうちも波なみ産う場ばへかけ

おへさん達うちが知ちッておへく肉會あひあひのことそらあ
けてたのよせいりしめたのいだらきるのがいの
おへアの後あきせびヨそらよよあやちがああわのら
子こわんとおへ今いまあきへ帰かえッてきたくうらと
きりがんのいりいあーだらはをの締しめッて
あゝのびがッイい舞まッてうらを舞まッてあゝのびが
子こへ、とよかからママらあむんをのいれたおへんが
まんごきごおはきあのおあッてその日のうちお

異人あや鼓つづみはれたらあきへッておへくとわんどう
あきよとてうらたヨらちとらッたらあから何あな
あきあきやあきニイあきあきあきあきあき
のらあきあきあきあきあきあきあきあきあき
だッたらあきあきあきあきあきあきあきあきあき
あきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあき
あきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあき
あきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあき
あきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあき
あきあきあきあきあきあきあきあきあきあきあき

ぎだくとおツたヨま糸まあまのまあまんまやまアま半まや
 のまんまをま通まるまのまりまやまこまツまたまかまだまままもまままめまも
 志まあまんまのま世まあまままがまたまぶまらまあまッまてま割ま者ま人まがま登ま
 てまあまるま知ま人まいまッまこまうまんまさまくま切まッまこまめまらまッまてま一まトまは
 るまとまとまあまんましまくまあまッまとま外まのまあまらまあまん
 ぞまのま半まがま嫁まあまッまたまのまごまらま私まのま半まをまとまるま
 のまあまらまうまとまあまやまアまあまんまらまらまッまがまのまのまでまスまヨまアま
 ヤまッまとまうまでませまうまエまとまもまあまやまアま半まのまままらまあまやま



井の端乃
 秋色
 橋あぶはし
 河の畔

安房巻三

十一

うろこ坊主うろこ「やせスヨウやせ」
 おろろさんあ〜のぞんの糸いとさんが紙かみ室むろ
 さんと同どう伴ばんお紙かみの紙かみきき来きあさつとをりだ
 からモシお主人しゅじんの家いへお母はは「おつたらうらうら〜
 うらもせ〜」おつ時ときおんお母ははお母ははと来きてお
 ろしヨそ〜おむらうさんお紙かみ室むろさんの来き
 こを耳みみうらとせ〜おらとあ〜アノ医い者しやッやう
 のおおめめからヨヨ「オヤどん〜さんお紙かみ室むろの

おあッ〜お助たすけと名なをか〜のうエまやんして
 かわからホニこッ〜ヨヨ「さんあおひも〜
 からであらあむらさんらむらと糸いと細こ〜である
 ヨヨ「ゆめ〜」ササ「イエそうであるの井せ先せんはせり
 女おんなおかけちやア志しんせり〜ヨヨ「病人びやうにんをかけ
 ちあ〜あさんせり〜うチマおむらびのむら〜ホ
 タホ〜「イヤあ〜さんのはのむら〜のあやア
 あ〜あ〜ヨ〜のむら〜お紙かみ室むろの月つき宮みや

安愚樂三

十一

さぬを殺さのこ子 ツアヤ人ぎの葱イはく
 ちあつま ち私 ちあつまのひとと吸ひまきた
 やぶつ故と秋の費 あむらりサ ひく くあつま
 ツケ。くニ ああつま ああつま入サアモウ ああつま
 ち ああつま ああつま ああつま ああつま
 おねくと南馬屋のぬけ ああつま ああつま
 ころ北廓へ ああつま ああつま ああつま
 くだの子 ああつま ああつま ああつま

あふたあ ああつま ああつま ああつま
 ころんから ああつま ああつま ああつま
 か ああつま ああつま ああつま
ひアレサモウ ああつま ああつま
 ころんから ああつま ああつま
ひアレサ ああつま ああつま
 ころんから ああつま ああつま
 ころんから ああつま ああつま

安房心集

三

かくしにのびんぎうふみつたから僕がね孫の卓
 見をのろはふ海人とあざのグット庵して洋池
 米分から甚学サハテ西洋学もあまト漢学史
 紀章句論語見の陸十二万二千四百六十六石
 あんぞをちつとむかりやせると支那の因循が
 傳深くとあつたお害おあつやを君の如の島も
 らやく洋学とせあがせあせく方今の形勢で
 洋学をあげりやア夜りあけ移入ヨハテサゆゆ

あらふともあつたせくをさやア商人の商人
 エ人のエ人ごけの因化ごの子中が因今洋新政
 の有がらんらとあやア国民同一自立の権を
 ありつ昔字帯紙袴ごも洋術でも馬でも車
 ても務を次身たると定是因迫の裁華たり
 とも澄財の裁書おあつたごごが初ち自立自
 立の権ごあつた自立の権ごの自由の理ごの
 と一ト口お解イてきうせるとを学文育野蕃の

後ハそんなあつその身の勝をあるに任せても善
 悪とも政府がむかひあひあふのどとわりのふ
 やうらがあつらつらあつらヨハ帝都都遠近と
 あく競教があつらあつらあつら諸社諸宗の
 教道作が勉勵するが僕がけ敷を命せらるる
 いやア終岡の申利先生が譯した自由の理
 を譯解するまじく世の瞶昧を醒はしたる者
 ぶテマツ一巻ト云ふはのちのちありと云ふはと
 ありと云ふはのちのちありと云ふはと

是れは俗間の知覚をひくき人の知博を
 弘めるのの新開紙のことと云ふヨ今朝糸澤町
 の日新堂より屋イタ新ぶんのあ十八号たが
 実小催證有益まこととあるヨ志し傳聞の
 語がねくともりきね人横濱の毎日新聞小
 假名垣魯文が往還の便に代錢を取
 らまじく税身と係んだあんどつふ大虚税が
 改号すま二日ともあつらあつらあつら
 改号すま二日ともあつらあつらあつら

長瀬集三



女界樂三

十一



女界樂三

十一

然らば新報雑誌踊躍足てゐるそのごとくむんぶん
 かきつゝのる遠くサ子十二是らこまの僕も徒然
 の余りおかりくその珍聞誌と号ス戯述ごら
 イヤ世の中ゆの新聞外の珍聞があるヨまそれ
 初めおかりく建てるがあるが建白人の極中
 めお驚愕家々建言書を所採用おなるま
 で所用掛りせと持出てあぬり他を愚弄
 する文筆おやらんものを政府に出御おかよん

ぶら町用ががりゆでの落交おあるとんご男ご
 とさんご志のりまごさうだが極分殊況サ
 子け文面を獨と酒のめさめお一寸續とき
 さらせやせらへん

一 悪あがら書附をぬき建てるゆつりひ
 凡そ用をく有用お究め経済を務
 衛國第一の美とぞんたてまつりひ
 人民毎戸登装の季お至りひての一般

毒を吐せさるるはしは虫人形を刺傷し
 寝夜睡間を破り白登の活針をさすま
 たげの而己よて実小無用有害の小虫と
 中あがら彼も怪生靈の小敷あり採
 用小よろそ有登の一端ともおあるべく
 哉とぞんとたて中うりいつらぐ 愚考
 彼に而彼と志く火中不投没りし
 以んが則ち火氣小化し發着致しより

ちからを存つきの彼英國のゼームスロツ
 トある若釜蓋湯を小糸ト沸躍りし
 より蒸氣機関を發明仕いと同論して
 小力を合しと大力と異なるの竊理とぞん
 トたてまうの御府中近江志て而既
 近向くへ御布令あらせらる毎戸取遣
 させぬ敷百両びれの者を以て毎日十二
 字刺砲の次第の代りとおそをさせられ

夏季ニテ月也費しお成以 出某の務盡
あそびさきいり百錢一揚の少端とせ
おあるべくや一粒万倍の成功利も無用
と成て有用小充いき死あめんむり小成
い賤身を富むる為案小やうせけ殿建言
奉りい位第一出採用あもお成りけ上
面目有難く仕合ふぞんとたてまつり
悪愷きんげん願を百萬拜

浅草雷神門前

富田利馳右部

ナントおじい奴があるもんぢやアねん子是等
が所謂とあのと名案かテ理らりのやうだが有
名無実な何の役もたらやア志務(免角早
春迎の生岐があるからめりふ西洋の毛髪
あどいぢね秘へのサ僕がこんどの建白あどい
美小園登の勇一なるものも必しふ一個の利

ビール十八文
サンパン二十文

上酒 三文

月日

重の
翅の
雨の
月

燭燭

の
照
穂



酒不杓らむ一團の富をほ我大皇神國の貴
威を地球一田小輝じ億長不朽の深策を捧る
のぐらら昔の達言故の古の兵力あぞと一團
ほしき輪をなすはサヲヤ又ほほのかりめさヲ
しくあ移へ親方小ヲウスを大切ほく焼鍋を
一枚あつらへてらんおほくはか客の煮このぐら
と云からタル彼のスウフへるまんと賢徳をおと
てよく煮てらんおほくはか客の煮このぐら

らやの勤平タゼトスズト十三字の刑地
予びツクシ
アモウ 刺限ウ 志らんゲエ
○ 第四五編 ひきつろく 出板 け 改 輯
ハ 西洋 衆毛の 六編 あく 出 披 露 の
當世 流行の ざんざり あく 洋 衆
書生の 大穿ら 長 塾 申 実 状 子 流り
たる 濟 勢 概 括 評 判

安愚樂鍋三編下ろ

發 行 書 肆

心齋橋通南久室寺町	伊内屋善兵衛
川 北久室寺町	河内屋源七
川 北久太郎町	河内屋喜兵衛
名古屋本町三丁目	菱屋藤兵衛
八丁目	菱屋平兵衛
日本橋通一丁目	須原屋茂兵衛
二丁目	山城屋佐兵衛
同	小林新兵衛
同 芝神明前	岡田屋嘉七
同	和泉屋市兵衛
横山町三丁目	和泉屋金石衛門
浅草茅町二丁目	須原屋伊八
本石町二丁目	梶屋喜兵衛

010190522844

